東方蜥蜴噺

一咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方蜥蜴噺

【Ｎコード】
Ｎ１１４３Ｓ

【作者名】
一咲

【あらすじ】
これは幻想の蜥蜴の噺。永い時を生き、妖怪となった一匹の蜥蜴の物語。一体それは周りに何を齎すのか……。

第１話：蜥蜴の妖怪（前書き）

※この物語は東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。
※主人公はオリジナルキャラです。
※独自解釈や独自設定が含まれています。
※原作キャラに無理矢理絡みに行くことは多分ありません。
※転生モノではありません。また、幻想入りモノでもありません。
※この物語は幻想郷ができるより遥か昔から始まります。

上記がダメな方はブラウザバック等をお願いします。

それでも読んでくださる方は、よろしければ何か可笑しなところがあれば指摘してくださると助かります。

第1話：蜥蜴の妖怪

オレ、ゾンビッス。

すいません、冗談ッス。本当は蜥蜴（トカゲ）ッス。蜥蜴の妖怪ッス。妖怪と言っても新米なんスよ。妖怪に成り立てッス。今朝起きたら妖怪になってたッス。体が大きくなってて、二足歩行も出来るようになって、考えることや話す事が出来る様になってたッス。まぁ、外見は何処からどう見ても只のデカイ蜥蜴なんスけどね。

オレが只の蜥蜴から蜥蜴の妖怪になれたのは昆虫やクモ、甲殻類にミミズ、あとは果物等の餌が豊富であったことと、ネコとイタチにアナグマ、ヘビ等の天敵が近くに居なかったことだと思うッス。

あ、「偶々居なくて生き延びてただけ」とか「この勘違い野郎直ぐ死ぬな……」みたいな勘違いはしないで欲しいッス。こう見えても勘だけは中々のモノを持ってると思ってるんスよ。只の蜥蜴だったから漠然としか分からなかったけど、昔から「こっちはヤバイ」とか「あっちに行った方が良い」とか感じてたんスよ。そう言うこともあって危機感が無いわけじゃないッス。寧ろ有り過ぎるからこそこうして妖怪になったと思ってるッス。

まあ、「逃げてるだけじゃねーか」って言われると否定できないんスけどね……。危なくなる前に安全な場所まで移動してばっかりだったから反論できる隙間が無いんスよ。

と、まあオレのことは此処までにしておくとして、今現在オレ、窮地ッス。初めて見る形の生き物が何かよく分からない物をオレに向けているッス。それも単体ではなく複数で。ただ、アレはヤバいってことは感がずっと警鐘を鳴らしているッス。目の前の生き物達からは何も感じないのに、持っているものはヤバイってどういうことッスか！？

流石にまだ死にたく無いッスからどうにか切り抜ける方法を考えないと……。

「……オレに何か用ッスか？」

話が出来るかは判らないが、何もしないよりはマシだし、駄目だった時の為に他の方法を考える時間が少しでもいいから欲しい。
オレの言葉を理解したのか、よりいっそう敵意やら殺意やらが強くなった。あれ？　ひょっとして選択失敗したッスか？
死を覚悟しないといけないッスね。と思ったその時、救いかもしれない声が聞こえた。

「あら？　あなた、喋れるのね」

集団の中から他とは違う姿をした者が現れた。
何か左右の色が違ううえに、上下で色が反転してる変な姿だけど、オレ的には良いと思うッス。他の奴らより好感が持てるッスね。

「ああ、でもそれなりしか、ッス。知っている事より知らない事の方が圧倒的に多いッス。例えば、あんたらが何なのかは知らないし、持っている物についてもソレはオレからしたらヤバイ物ってことしか知らないッス。まあ、ヤバイってことは解ってるッスからこうして殺されないように会話を持ち掛けた訳ッスけどね……」

遠回しに殺さないでくれと言いつつ、反応を窺う。
何時でもこの場から離脱できるように体勢も警戒も解かない。

「そう……。なら、こうしましょう。貴方が私の物になりなさい。そうすれば今この場で貴方が死ぬ事は無くなるわ」

周りの反応を見るに、ざわついてるところから察するにこの提案は連中の予定外なのだろう。
ふむ……。確かにその提案は魅力的ッスね。でも、それに乗る訳にはいかないッス。

「確かに今この場では死なない。けど、アンタについて行っても殺されないという訳じゃない。寧ろ此処で死んでいた方がマシと思える扱いを受けるかもしれないッス。少なくともアンタについて行くとオレの自由は無いって事は解ってるッス」
「あら、どうして自由が無いと思うのかしら？」
「それはアンタを見れば判るッス。アンタは隠してるつもりだろうけど隠しきれてないッスから。まあ、顔どころか瞳を見ても本当に判り辛くて殆どの奴らは気づかないだろうと思うッスけどね。でも、オレの勘は並大抵の物じゃないッスよ」

こういう時は勘よりも観察眼の方が正しい気がするが、それは今は置いておこう。

「……ふふ。貴方、面白いわね。気に入ったわ。貴方の望む通り、見逃してあげる」

いきなり小さく笑い出したかと思えば、気に入ったのに見逃してやると言い出す。オレにはコイツの思考が理解出来ないッス。
見逃してくれるのならその言葉に甘えさせてもらうッス。でもその前にしっかり確認しないといけないッスね。背中を見せた途端に襲いかかられるのは嫌ッスからね。

「本当に行って良いんスね？　後ろから攻撃とかしないんスよね？」
「私はしない。それに周りの者達にもさせない。だから早く行きなさい」

「わかったッス。ありがとうッス」

一礼してからその場から急いで離れる。当然奴等とは反対の方向へ。

姿が見えなくなってもなお進み続け、それなりの大きさの池に着いてやっと足を止めた。

……ヤバかったッス。初めて命の危険を感じたッス。これは出来ればもう二度と感じたく無いッスね。今後あっちに行くのは止めよう。

奴等から逃げてきた方向を一度見て、そう決心した。

……さて、飯になるものを探すか。

第1話：蜥蜴の妖怪（後書き）

今現在の主人公の知識は中途半端です。
今回で言うと、「色」の概念は知っています。しかしそれぞれの色については知りません。
例を挙げると、「赤」や「青」等の言葉は知っているけど、どの色が「赤」で「青」なのかは知らない。ということです。

その所為で、誰かさんの服の表現がややこしくなっています。（私の文章での表現力が低い事も関係していますが……ｏｒｚ）

第2話：名前？

ヒトなる者と遭遇してから長い時間が経ち、色々な事を知った。
あれから一度もヒトと出合った方向には行かず、今現在拠点としている池の近くから余り大きく動くことをせずに妖怪の知り合いや妖怪以外の知り合いを増やして、様々な情報を交換して過ごしている。
奴等が『ヒト』なる者だと知ったのも情報交換の賜物だ。
情報交換は大事だな。情報を共有することにより此処の生き物は生きてこられた様なものだし。

何故池の近くを拠点としているのかというと、色々な生物が生息していること、妖怪となった今、天敵だったイタチやら何やらに襲われなくなったことが理由に挙げられる。……あと、景色が良いってのも理由に入るかも。
前者は情報を入手するのに役立ち、後者は岩陰に隠れなくてもいいってことだ。
……景色は和み成分と考えよう。

鳥や虫、蜥蜴に犬やらその他諸々、そして数は少ないけど妖怪、と本当に様々な生物がいる。此処にいる妖怪はオレ含めて基本的に大人しい奴しか居なく、妖怪以外の生物を襲うことは余りない。エサは一々池から離れた所まで行って採ってくる者が多い。散歩のような情報収集のついでにエサを採るのがここの妖怪の暗黙の了解となっている。妖怪以外の生物の一部も同じようにしている。

外部から此処に近付いて来る者が居れば即座にそいつの身体的特徴を流して、そいつのことを知っている者がどの様な奴かを開示する。そして此処にとって害になるなら妖怪であるオレらが退治ない

しは追い返し、害にならないなら此処に来た理由を聞き出す。
理由を聞き出した後、そいつが此処に留まらないなら此処から離れるまで放置もしくは浅い会話をする。此処に留まるつもりなら情報を要求し、此処の在り方を教え、仲間とする。もし裏切れば即座に仕留める。仕留める為に妖怪達は最低2体は此処に居なければならない。情報収集と此処の守護を交代でする。それも妖怪達の間の決まり事だ。

オレは守護の任に就いている間はもう1体の妖怪と軽く手合わせをして暇を潰している。暇潰しと適度な運動、外敵との戦闘の為の鍛練、と良いこと尽くめなので、やらない手はない。
オレと手合わせした妖怪が他の妖怪とも手合わせしているらしく、自然と妖怪達の間で流行りだした。

と、まあこんな感じでそれなりに長い時間を過ごしていた。

そして今は情報収集を兼ねた散歩をしている。
……うーん、今日は大した収穫は無しか。
そう思った瞬間、左の方から声が聞こえた。

「あら、貴方は……」

声に反応して視線を向けると、そこには赤と青の服を着たヒトが居た。
こいつはあの時の親玉か。

「そう身構えなくてもいいわよ。今回私は貴方を捕まえに来た訳じゃないわ。それに見れば判ると思うけど、今の私に貴方を捕らえる道具も人手も足りないわ」

確かにこいつは手ぶらであるし、周りに他のヒトの気配は無い。
警戒は解かないが、身体から力を抜いて楽にする。
「なら何故此処にいる？」
返答次第では……、と無言で威圧する。
だが、俺の威圧を受けながらも何事も無いように問いに答える。
「ただの気紛れよ。気分転換に散歩をしていたら偶々貴方と出会っただけ」
「……」
……嘘はついていない、か。
どうしようかと悩んでいると声を掛けられた。
「そうそう、私は八意永琳。貴方は？」
「八意永琳？　なんだそれは？」
「私の名前よ。貴方の名前を訊いたつもりなんだけど、その反応をするってことは名前が無いのね」
「名前って何だよ？」
「名前は個体を識別する為の記号よ。同じ種族といっても容姿は似ているけど同じではないし、思考や性格は全く違う者達もいるでしょう？　そういった大勢の中から特定の誰かを呼ぶときに分かり易くする為に名前はあるのよ」
「……で、あんたを識別する記号は『八意永琳』って訳だ」
「ええ、そうよ」
「ならオレも自分の名前ってもんを考えてみるわ。次会った時までにな」
「そう……」

ん？　何かほんの少し暗くなりやがったぞ？

「何かあったのか？」

「ここのところあることに掛かりきりだったから気分転換に散歩してたのにそのことを思い出しただけよ」

「うっ、それは悪かった。すまん」

「気にしなくていいわよ。別に貴方を責めている訳じゃないわ。それにそのことが嫌と言う訳じゃなくてただ疲れているだけだから」

しまったな、口ではああ言ってるけど……。

とりあえず別の話題を見つけて、微妙で気まずいこの空気を変えないと。

「そ、そうだ！　ちょっと見てくれ！」

「何？」

今こそ好機！　オレの力を見るがいい！

「はっ！」

一瞬体が光に包まれる。そして光が収まればあら不思議。

「なっ！」

ふふふ、どうやら驚いているようだな。オレが妖力を使ってヒトの姿になったことに。

だが、八意の口から出た言葉はオレの予想していた言葉とは全く違う言葉だった。

「貴方、女だったのね……！？」

あるぇ〜？

第2話：名前？（後書き）

長い時間と書いていますが、少なくとも数年は経ってます。
『一日』はあると思いますが、『一時間』や『一週間』、『一ヶ月』に『一年』といった単位はまだ無い（少なくとも主人公の周りには無い）と思うので長い時間と表しています。ややこしくてすみません。
口調も時間経過につれて変わりました。

第3話：雌です（前書き）

8／6　一部修正

第3話：雌です

深緑がほんのりと混じった、腰の辺りまで伸びている艶やかな黒髪に、黒曜石を彷彿させる色合いをしているつり気味の眼、瑞々しく色気を放つ唇、そしてスラリとした身体とその細身に似つかわしくない程度に大きく実っている胸。

これが私から見たヒトに化けた彼女の身体。綺麗な顔に大きな胸とそれでいて細い身体。同じ女性として少しばかり羨ましく思うわ。

どうみても大きな蜥蜴でしかなかった彼女が何故こんなにも美麗にヒトに化けられるのか、かなり興味深いわね。

彼女を観察して、実験して、解剖して、研究したい。彼女の隅から隅まで調べてみたい衝動に駆られる。

でも前に見逃すと言ってしまっ……いやあれはあの時のみの話だから今回は見逃さなくても……でもさっき自分で言ったけど道具も人手も無いし……まあ私一人で彼女を無力化出来なくはないと思うけど……それよりもやっぱり一番の問題は輸送手段かしら……？　……。

八意は一体どうしたんだろうか？　いきなり俯いて黙りこんで……。

なんだか此処に居づらくなってきた。この場にオレと八意しか居ないのに八意は考え事してるみたいでオレの存在感が空気みたいになってる気がする。

「おーい」

八意の顔の前で手を何度か振るが、反応しない。
……どうしたものか？

「おお、すげぇ！」

何となく八意の頬に触れてみたがスベスベでふにふにだった。
ああ、気持ちいいぜ……。……って違う違う。今は八意の頬を堪能している場合じゃないんだよ。

「ふ～」

八意の耳に息を吹きかける。これなら絶対反応するだろう。そう思ってやった。反省はしていないし、後悔も無い。
だが八意は無反応だった。そしてオレはこの瞬間から『絶対』という言葉を信じなくなった。

「うーん……何か良い案は無いものか……？」

八意を観察してみる。ちゃんと観察すると、突破口が見つかる可能性があるしな。
腕を組み、俯きながら思考に没頭している八意。倒木に座り脚を組んでいるのだが、脚を組んでいるお陰で長い裾の隙間から脚が見えている。チラリと見えるスラリとした御御足が途轍もなく綺麗で眼福である。御馳走様です。本当に有り難う御座います、八意さん。

！！

そうか、八意の御御足を舐めれば！　……いや待て！　確かに八意の御御足はペロペロしたくなる程の美脚だが、いきなりペロペロ

したら殴られる上に嫌われる！　オレは八意が好きだから出来れば嫌われたくない！　でもペロペロしたい……！　だがペロペロすれば……！　くそっ、一体オレはどうしたらいいんだ！？
オレが頭を抱えて悶えていると声を掛けられた。勿論八意に。

「何を身悶えて居るのよ？」

八意さんよぉ、それはアンタの所為なんだよ！
アンタの美脚がオレを可笑しくしたんだ！！
という訳であなた様の御御足をペロペロさせて頂きたく存じます。がそのような事を口にすればボッコボコにされるのは火を見るより明らかなのでやめようと思います。あれ？　作文？

「い、いや、何でもない」
「そう？　ならいいんだけど」

危ないな。下手な事を口にするよりは濁した方がまだましだから濁したけど、もう少し踏み込まれたら口が滑ってたな。

「それよりも服は出せないの？」
「服？　ああ、忘れてた」

一度自分の身体を見て、全裸であることに気付く。
服はヒトに化けた時にあったりなかったりと毎回不安定なんだよな。それにオレ以外の奴に見せるのは八意が初めてだったから今まで服の有無は気にしなかったし。まあ、そんなことより服か。
ホイ、と掛け声と同時に妖力により身体の露出が減り、服が着込まれていた。

「そんなに簡単に服を着れるのは羨ましいわ」

「そうか？　オレはこれでしか服を着られないから判らないな」
「そういえばその服、私のと同じなのね」
「悪いな。オレの知っている服はこの服しか無いから利用させてもらってる」
「別にいいんだけど、私以外の人にその服を見られないで頂戴ね」
「おう、それは解ってるよ」

ならいいわ。と言い、立ち上がる八意。
もうそろそろ帰らないと。と服に付いた砂や小さな木片等を軽く叩き落として歩き出す。

「あ、そうそう」

八意が歩き出し、オレも戻ろうと踵を返した時に話を切り出してきた。
顔だけで振り向くと八意も同じ様に顔だけでこちらを見ていた。

「何時になるかはまだ決まっていないけど、近い内に人は月に移住するわ」
「え？　つきって空に浮かんでるアレのことか？」
「ええ、そうよ。だから貴方とはもう会うことは無いかもしれないわね」
「……そっか。『かもしれない』なら逢える可能性は残ってる訳だ。なら「さよなら」は言わないぞ。元気でな、八意」
「最後になる可能性の方が高いわよ？　それと永琳でいいわ。貴方は私の親しい存在だし、最後かもしれないし」
「分かったよ。またな、永琳！　次逢う時はオレの名前を教えるから！」
「……そう、楽しみにしているわ。またね、名も無き蜥蜴の妖怪さん」

互いに振り返る事無く自分の場所へと歩き出す。
次に永琳の顔を見る時はオレの名前を告げる時だ。

「必ずオレの名前を言ってやるからな。永琳」

また逢う時まで生き抜いてみせるさ。無意識の内に手を拳に変えて強く握り締め、固く決意する。
さて、飯探して帰るか。

第４話：中立

「た、大変だー！！」

日が沈み、もうじき夜闇が世界を覆う頃、一体の妖怪が慌てて戻ってきた。

皆が何事かとざわめき始める。オレは寝ていたので余り頭が回ってなかったりする。

「どうしたんだ？」

「よ、妖怪が！　沢山こっちに向かってきているんだ！！」

妖怪以外の者達は一斉に逃げ出したり隠れたりする。

幾らオレら妖怪が居ても自身に危険が及ばないことは無いので当然の行動だからしょうがない。

「で？　そいつらは今何処に居るんだ？」

「い、今は犬の妖怪がそいつらに話し掛けて時間を稼いでるはず……」

相手方の目的が分からないのでどうしたものかと悩んでいると一羽の鳥が急いでオレの所まで飛んできた。

その鳥曰く、どうやら犬の妖怪が他の妖怪達とこっちに向かっているらしい。

「……まあとりあえずは用件を聞こうか。それからどう対応するかを考えよう。今此処に居る妖怪全員集めてくれ」

わかった、と一言残して妖怪達に声を掛けに言った。

さて、面倒なことにならないといいんだが……
仲間が集まって直ぐに外の妖怪達が姿を現した。

「此処まで連れてきて申し訳ありません。自分だけでは判断できない用件でしたので」
「気にするな。それよりあいつらが何しに此処に来たのかを後ろの奴らに話しておいてくれ」

どうせ碌なことではないだろうけど、聞かないと立ち去ってくれそうにないだろうな。面倒臭い。
目の前の莫迦っぽい奴に話を聞くか……。熊の妖怪か？

「一体何の用だ？」
「俺らの下に降れ」
「理由は？」
「これから俺らはヒトの集落を襲う。その為には戦力が必要だ。だからお前らを俺らの下に加えてやろうと言う訳だ」

……コイツ、莫迦だな。完全に莫迦だ。
さて、どう言ったものかな？　まあ、決まっているんだけどな。

「お前達の下に降る理由としてはその理由は弱すぎる。それにオレ達此処に居る妖怪はお前らの様に好戦的ではない。更にお前如きの雑魚の下に就くなんて例え演技でも嫌だね。ついでに言うといきなり降れと言われて降る様な莫迦は此処には居ないんだよ、莫迦」

目の前の妖怪の顔がみるみる赤に染まっていく。
あー、駄目だなコイツ。高がこの程度の罵声ですらない言葉で頭に血を昇らせてるなんて……。コイツは集団の頭には向いてなさすぎるだろ。百歩譲って莫迦なのはいいとしてすぐに熱くなるような

ら頭どころか集団にも要らないぞ。

「おい、今俺を雑魚っつったよな？　蜥蜴の癖によ」

「なんだ、その耳は飾りだったのか？　それとも頭が飾りなのか？　そんなこと確認しなくてもいいよ。オレはしっかり雑魚って言ったぞ、莫迦。あと蜥蜴を嘗めんな」

「死ね！」

「お前がな」

いきなり殴りかかってきたものの、最初から拳が飛んでくることを予想していたオレにとっては何の問題にもならない。

相手の攻撃に合わせてこちらも攻撃を仕掛ける。こちらはどのような攻撃がくるかはある程度予想しているので攻撃をかわせるが、相手は不意を付かれて身体が膠着してしまい、回避行動をとれずにオレの攻撃をまともに受けてしまった。

「グッ！」

熊の妖怪の顔を右の拳が捉える。殴りかかった勢いと殴られた勢いを殺せずに少し体勢を崩す熊の妖怪。

オレがその隙を逃すはずも無く、当然追撃する。但し殺すつもりは無いので一発だけ。

「こいつはオマケだ」

左の拳をがら空きの腹に叩き込む。

熊の妖怪は体を「く」の字に曲げて近くの木まで吹き飛び、そのまま木と共に倒れる。

「……なんだ、もう終わりかよ」

熊の妖怪は気を失っているようだった。
まあ、この莫迦をボコボコにするのは今回のことには必要なことではないので放置する。

「さて、お前達――いや、お前の本当の目的は何だ？」

オレを誑かそうなんて甘い。他の奴は騙せてもオレの目は欺けない。どうにか他の妖怪達と同じ様に振る舞ってはいるが、違和感は拭えない。
余所者の妖怪達はオレが誰に対して言っているのかを知る為に仲間達を見渡す。が、当人はどうやら白を切り通すつもりらしいのでさっさとお帰り頂く為に名指ししてあげる。

「お前だよ、狸野郎」

狸の妖怪のまるで心外だと言わんばかりの大袈裟な動作に腹が立つ。
狸の周りの妖怪達は訝しんだ目でオレと狸を見比べる。

「まあ、いいさ。例えどんな目的であれ、オレらは此処から動かない。ヒトにも妖怪にもつかないからさっさと此処から消え失せて好きにしろ」

熊の妖怪をしっかり持って帰れ。と付け足し、話を切り上げる。
忌々しくオレを見る狸野郎の顔は滑稽だった。忌々しく見るのは粗方仲間達に猜疑心を持たれて動きづらくなったことからくる恨みとかだろう。くだらないな。

「そうそう、お前達二度と此処に来るなよ？　もし来た場合は何も

言わせないまま容赦なく殺すから。覚えておけよ」

ほんの少し妖力を解放して威圧しながら忠告する。

狸以外の奴等は恐怖からか素直に何度も頷き、そのままそそくさと逃げ帰った。勿論熊を連れて。

「……な、なあ、本当に良かったのか？」

熊や狸達の姿が見えなくなった後、鼬の妖怪が確認をとりにきた。

他の妖怪達もコイツと同じ様に思っているようだ。

「良いんだよ。それともお前は意味の無い争いに参加して無駄死にしたいのか？　もしそうならオレは止めないからアイツ等を追い掛けたらどうだ？」

鼬は黙って首を横に振る。

流石に誰だって無駄死にはしたくないだろうから当然だな。

「でも、妖怪達はヒトを襲いに行くんだろ？　俺達も妖怪なんだし……」

そこから先を言わなかった。いやオレが言わせなかった。

そういえばオレ以外の此処の妖怪はヒトに合ったことが無いんだったな。

「妖怪だからヒトを襲わないといけない訳じゃないだろ……。確かにヒトはオレ達妖怪より非力な生物だ。でも、知能はオレ達より遥かに優れている。その優れた知能は妖怪を一撃で仕留めることが出来る武器を創り出す程だ。オレが初めてヒトに合った時、死なないように事を運ぶ為に頭を働かせていたが、それでも頭の一部ではオ

レは此処で死ぬのか、と諦めていたぐらいだ。今生きているのは単に運が良かっただけなんだ。確かにヒト単体では妖怪に勝てる道理は無いが、数はあちらに分があり、更に妖怪を葬る事が出来る危険な武器まであるんだ。それを知って尚ヒトを襲うのは莫迦しか居ない」

そんな莫迦は此処には居ないだろ？　と鼬に問い掛ける。が、答えは求めていないから締めの言葉を続ける。

「と言う訳だ。これでこの話は終わりだ」

そう、ヒトに関わらなければいいだけなんだ。そうすれば無駄死にする事は無いし、じきに月に行くんだからそれまで放っておけばいい。それだけだ。

……そういえば誰にもこの事を言ってなかったな。……まあいいか。

第４話：中立（後書き）

ヒトが月に行く事も名前についても誰にも話していません。自分の名前を考える事に思考の半分ほど使い、残りの半分は何時も通りに行動する為に使っていたので、ヒトが月に行く事も名前の事も忘れていました。ちなみに名前はまだありません。無いといっても主人公の頭の中に無いだけで私の頭の中にはちゃんとあります。名前は次回辺りに出てくる予定です。

第5話：ハジマリの大火

「くそっ！　何だよコレは！」

オレの周りは前後左右何処を見渡してもまっさらな平地が広がっている。

「何でだよ！　なんでなんだよ、チクショウ……」

……何もかも無くなってしまった……ただだっ広い更地でオレは独りだった。動物や仲間の妖怪の遺体どころか、草木さえも消え失せた。それなのに、オレだけは死んだり消えたりすることなく生きている。

……生きているといっても、ただひたすらに業火によってその身を灼かれながらなのだが。

何故この様な事になったのか？　それは七日前に遡る。

此処を住処としていない妖怪達がヒトの街を襲いに行ってから数日が経った。

オレ達は他の連中と諍いを起こす事も無く、今まで通りひっそりと暮らしていた。

「……今日も変わらず異常無しで収穫無し、か」

空腹を満たす程度に食料を確保し、帰路についていたオレはふと空を仰ぎ見た。

満天の星空が茂った森越しにオレの視界を埋め尽くしていた。

「夜空はやっぱり星が無いとな」

うんうん、と意味も無く自分の言葉に頷く。夜空には星も要るけど月も欲しいところだな。
月で思い出したが、そういえばヒトは妖怪に攻められるより前に月に行っていたんだったな。妖怪共の襲撃は意味が無かった訳か。

「なんとまあ滑稽な事か」

意を決して攻め込んだものの、既に蛻(もぬけ)の殻だった。なんて実に無様だな。
無人の街にて呆然と立ち尽くす間抜けな妖怪達を想像し、くつくつと笑う。

「……アレは何日前だったか？」

ヒトの街のある方角から空へと延びる煙を見た。その煙の先にはオレには理解出来そうに無い建造物があった。地上から遥か上空を見上げているのにそれなりに形が見えるということはかなりの大きさの物なのだろう。
……この辺り一帯の木々よりも大きいんだろうな。と思ったのは何日程前だったか？　……思い出せないな。
それにしても空を飛び、月まで行く程の建造物を創り出すとはやはりヒトの技術は凄いな。
満天の星空に浮かぶ月を見て思う。

「――――――！？」

月を見た途端、寒気立った。
身体が勝手に動き出す。月を見据えたまま、いつもの池まで駆けていく。

「……何だ？　何が起こるんだ？」

漠然とした不安に駆られ、落ち着くことも出来ず、ただただ急いで戻る。

大変な事が起こる前に一刻も早く合流しないと……。

「あ！？」

月の一部が光る。注意深く月を見ていたからこそ見えたその光に恐怖を感じた。

何だ、今の光は！？　ヤバイなんてモンじゃない！　くそ、速く、もっと速く！

「間に合え……！」

あと少し、あと少しなんだ。だからまだ来るんじゃない！

生い茂る木々を抜け、見慣れた池と仲間達を視認する。

皆は息を切らして戻ってきたオレを見て、何事かと駆け寄ってくる。

「ハァ、ハァ……ゴホッ、ハァ……」

呼吸を整え、話を切り出す。――いや、本当は切り出そうとしたんだったな。

何故切り出せなかったか？　それはオレが口を開く瞬間、辺りが真っ白になったからだ。

視界いっぱいの白が消え、次に眼に入って来たものは空と大地と地平線だった。

「え？」

青と土色の二色だけ。辺りを見渡しても眼に映る色はその色しかなかった。
動物も植物も妖怪も関係無く跡形も残らずに消え去った。

「……え？」

オレには理解が出来なかった。
ついさっきまで目の前に集まっていた仲間達、鬱蒼と生い茂っていた森、癒しを与えてくれていた池。これら全てを一瞬で失った。
まるで今まで夢幻を見ていたのではないか？　と錯覚する位に綺麗に無くなっていた。
ほんの一瞬白い光に覆われただけで世界が変わってしまった。

「……ああ」

莫大な喪失感に襲われているオレに対し、世界は追い討ちを掛けてきた。
……何だか暑いなあ。まだ陽は昇ってないのに……。

「あれ？　何か、痛……い……？」

自分の身体を見てみた。そして驚愕した。
何故か燃えている。勢いよく燃えている。炎は猛りながらオレを燃やしている。
こういう事は認識すると神経がより敏感になり、更に酷くなるものだ。

「痛い！　熱い！　痛い！　痛い！　熱い！　痛い！　熱い！」

痛みと熱によって何度も大きく叫ぶが、次第に声が出なくなっていく。
身体の外側は焼かれ、内側は熱せられ、内外問わずに激痛が身体中を駆け回る。
……今すぐにでも死にたい。誰も居なくなった上にこの熱さ、この痛みから開放されるのなら死にたい。
だが、この炎はオレが死ぬことを良しとしなかった。死ぬどころか気を失うことすら許さず、ただただオレを焼いていた。
不思議なことに身体中焼かれている筈なのに何処も焼け爛れても炭化もしておらず、高熱に侵されている体内も何処も壊れる事無く正常に機能している。
痛覚と温覚だけを刺激して燃えているこの炎は何時になれば鎮火するのか？　鎮火を望み、眠ることも気絶することも出来ずに時が経っていった。

そして回想は終わり、今は炎が燃え出してから七回目の夜。
七日七晩食料どころか水分も補給できず、不眠で過ごしているオレには体力なんて欠片も残っておらず、気力も尽きかけていた。それなのにオレはまだ炎に包まれている。……何時になれば消えてくるのだろうか？
瞼が重く感じてきた。最期の力であろうが関係無い。月を見る為に残っていた力を振り絞り顔を上げる。
そろそろ終わりも近いな。でももし、オレがこの先生きのこるなら、この出来事を一生忘れない。どれ程の時間が掛かろうとも月へ行き、仲間達を消したあの兵器に関係する奴らを誰一人逃さずに必ず殺す。例え仲間達が復讐を望んでいなくてもやってやる。復讐(これ)はオレの自己満足の為に成し遂げる。だから覚えておけ。
眼に負の感情にまみれた思いを乗せ月を睨みつける。

「くそったれ……」

そしてオレの意識は途絶えた。

第5話：ハジマリの大火（後書き）

ヒトと妖怪に関する想像は間違いばかりです。
月に行ったヒトは半数程で、残りは妖怪から街を守る為に残っていました。妖怪達は普通に街を襲撃してヒトと殺し合いをしていました。
間違いだらけの想像の原因は外部に対して閉鎖的なコミュニティーだった為に外の情報を遅れて入手しているので勘違いしました。常に情報収集していると言っても行動範囲に限度があるので、情報の鮮度がそれなりに落ちてしまうことはしょうがない事ですが……。
その他の要因は、巻き込まれて死にたくないという理由から実際にヒトの街まで見に行った訳ではない。と言うことも含まれています。街まで行くと、ヒトに見つかれば攻撃され、妖怪に見つかれば戦うことを強制されるので近づきませんでした。

誤字脱字や何か可笑しな所や間違った言葉の使い方をしている部分があれば教えて頂けると嬉しいです。

第6話：時流れ……

あーもー、一体何だよこいつ等は？　オレを見るなり襲いかかって来やがって。その癖弱いときたもんだ。雑魚に集られる事程鬱陶しい事は無いぞ？

焦土と化した辺りに転がる無数の焼死体を跨ぎながら歩を進める。焦土や焼死体の原因はオレの能力である。

『ありとあらゆるものを燃やす程度の能力』。これがオレの能力。オレが燃やしたいと思ったものを好きな様に燃やすことが出来ると言うなんとも単純明快な能力。

例え燃やしたいと思ったものが耐熱性の高い物や不燃物であっても、燃やすと決めれば必ず燃やすことが出来る。好きな様に燃やすというのは、皮膚の一部のみを燃やしたり、全身燃えているのに死なない様に燃やすなど、自由自在に燃やせる訳だ。

この能力を使える様になったのはあの炎から解放された後からだ。

七日七晩炎に抱かれて意識を失った後の話だが、ふと気がつくと周りには見たことのある更地が広がっていた。だからあの出来事は夢ではない事を理解した。できれば夢であって欲しがったが、もう夢ではないと頭が認識してしまった以上仕方がないと諦めた。

それから身体を調べた。全身焼かれていた訳だが、何処にもその痕は無かった。頭も四肢も異常は無く、後遺症なども無かった。あの炎はどういう原理で燃えていたんだよ……。

身体に異常が無いことを確認した後、更地に居てもする事もしないといけない事も無いのでとりあえず歩き出した。

当てもなく足を動かしている間に気がついてから自分の内側でくすぶっているモノが何かを知る為に向き合った。時間が掛かったが、幾らでも時間があったので毎日少しずつ自分の奥の底の淵まで潜った。

その結果、自分の記憶の奥底に仕舞い込むつもりの、極力思い出

したくはないが、決して忘れてはならない出来事から二つの物を得られた。
　それが、『ありとあらゆるものを燃やす程度の能力』と『名前』だ。居場所も仲間も何もかも失ったオレは、代わりに今までよりもさらに確固とした『自分』を手に入れた。
　そんな訳でフラフラと歩き回っていると、何故か神を名乗る集団と遭遇した。そいつらはいきなり襲いかかって来たから正当防衛としてオレが能力を使いこなす為の実験台になって貰った。オレの都合などお構い無しに何度も襲ってくるので、完璧とは言わないまでもある程度は自由自在に能力を扱えるようになったわけだ。
　こちらとしては用済みで関わりたくないのだが、あちらが有無を言わさず襲って来るから面倒臭い。途中、蜥蜴の姿だから襲われているのかと考えてヒトの姿になってみたが、それでも襲われるのでどうしたものかと考えている所である。
　因みに服はまだ永琳の服を着ている。理由は最近オレを襲ってくる奴らの服を着るのは怪しまれる上にオレ自身が着たくないから。それと永琳の服以外で知っているのは奴らの服しかないと言うのもあるな。そして永琳を知る者は全て月に居るので見られても特に問題は無いだろうと考えた末の選択だ。

「貴様妖怪だな！」

　またかよ……。いい具合に腹が減ってきたからそろそろ飯でも食おうとか考えてたのに……。
　……いいこと思いついた。上手くいけば今後は襲われなくなるかもしれん。早速実行するか。

「毎度毎度ご苦労なこった……」

　ため息と共に愚痴を吐き出す。毎度と言ってもこいつ等からすれ

ばオレを襲うのは初めてだったな。……どうでもいいか。
オレに向かって愚直に突撃してくるのですぐに終わりそうだ。……まあオレの視界に入る位置に居るなら例え囲んだとしても意味無いけどな。
一人残して焼き払う。直ぐかつ必要最小限で焼き殺す調節も手馴れたものだな。

「さて、何故お前だけが無事な理由は分かってるよな？」

腰を抜かしたのか地面に座り込み、身体を震わせながら怯えた目でオレを見る。
良いねえ、その表情（カオ）。そそられるじゃねえか。なんて事は思わないけどな。

「分かってなかったとしても今から教えてやるから安心しろ。但し一回しか言わないからちゃんと覚えろよ？」

自分の右手を顔の前にもっていき、目の前で燃やす。
今の行動を見て更に身体の震えが酷くなっているところを見る限り、もし覚えられなかった場合に何をされるのか理解出来ない程頭が悪い奴ではなさそうだ。
少し気が楽になるな。何をされるのか分からない場合は処理して次に来る一団を待たないといけないからな。……待つと言っても向こうから勝手に絡んでくるんだけどな。

「今すぐオレの外見の特徴と名前を覚え、お前の所属する組織全員にオレを見掛けても攻撃しないよう伝えろ」

片腕を持ち無理矢理立たせる。自分の足で立てていることを確認して顔を見る。

視線が合うと身体を一度だけ震わせたが気にしない。早く終わらせた方がオレにもコイツにもいいから。

「オレの名前は火産霊沙羅（ほむすびさら）。あと、何時までもこの服を着ているなんてことはないから顔や髪、身体の特徴を覚えろ。しっかりと覚えて、数日の間決して忘れない自信がついたなら立ち去れ。分かったな？」

まだ恐怖が残っているからだろう何度も頷き、オレの姿を脳に刻み込むのにそれなりに時間を掛け、全力疾走して去って行った。

あれだけ脅してやったんだ。確実にオレの容姿と要件を伝えてくれるだろう。もし伝えていなくても今後襲ってくる奴等は問答無用で焼き殺せばいいだけだから何も問題ないな。

……飯食ってさっさと移動するか。

第6話：時流れ……（後書き）

『ありとあらゆるものを燃やす程度の能力』。自由自在に全ての物を燃やすことが出来る能力。

調理時の火力調整がとても簡単に出来ます。他にもゴミを一瞬で塵に出来るので、時間も掛からず二酸化炭素の排出量も少ないと思うので多分エコです。他にも色々と用途がありそうですね。

こうしてみると便利そうに見えますが、結構不便かもしれません。理由としてはこの能力で出した炎しか自在に燃やせません。他人が出した炎どころか、自分で木片等から熾した炎すら自在に燃やせません。……自分で炎を出せばいいから問題にならないかも？

戦闘面では、最強の矛と言ってもいいと思います。ゲーム風に言えば、基礎ダメージが高いのに相手の防御や魔法防御等のステータスを無視して、さらに半減や無効、吸収と言った耐性をも貫通してダメージを計算します。どんな相手にも安定した高いダメージを与えられます。ラスボスあたりが使ってきそうな攻撃ですね。

防御面は身に炎を纏って格闘等の近接攻撃を躊躇わせる程度ですかね。遠距離攻撃に関しては燃やしてしまえば良いかも知れません。あれ？　意外に隙が無いような……？　弾幕ごっこではそんな無粋なことはしませんけどね。

第7話：対風神

神に遭遇しなくなってから数日たったある日、一人の神が声を掛けてきた。

「アンタ、妖怪だね。ちょっと私と闘ってくれないかい？」

そして一対一の大戦が始まった。

それが今の状況の原因である出来事だ。

「まだまだいくよ。そらそらそら！」

まるで雨の様に降り注ぐ巨大な柱達。

その柱達の間を縫うようにかわしていくがいかんせん数が多すぎる。

「……ちっ」

雨粒と違い地に着いても跡が残る柱の所為で行動に制限が掛かっていく。

戦闘――というより戦争――が始まってまだ数刻も経っていないにも関わらずこの劣勢とはな……。

「ほらほらどうしたんだい。まさかこの程度ではないだろう？」

五月蝿い。柱を落とすだけの簡単なお仕事をしている奴は黙ってろ。少しでも気を抜くとすぐさま御陀仏な状況なんだから集中させろや。

まだ能力を使ってはいないと言っても、それは向こうも同じな訳

で、この劣勢の言い訳にはならない。様子見でこの差はキツいな……。

「……くそが！」

あまり能力を使いたくないけど柱が密集しすぎて動けなくなる前に燃やすか……。出し惜しんで負ける程の阿呆ではないし。

柱が密集している場所に近付き、火を放つ。火を放つが、自然に燃えてもらう為にただ火を放つだけに止める。

一瞬で燃やしたり、豪快に燃やしたりすると能力が見破られるかもしれないのでよろしくない。今はまだ『炎を出す程度の能力』程度に認識させないと駄目だ。相手の能力が全く判っていないのに、こっちの能力を完全に見破られると一気に畳み掛けられる可能性があるからな。多少は判っていればまだ何とかなるかもしれないが……。

「やっと炎を使ったね。ならこれからは此方も本気で行かせてもらうよ！」

何言ってんだよこいつは？　何故オレが炎を扱うことを知っている？　……もしかしてあの時に脅したアイツから聞いたのか？　……もし俺の話が伝わっているなら能力も結構ヤバい所まで知られているんじゃないか……？

声を掛けた時の機嫌が良いというか、やる気があるというか、闘うことに対して随分と乗り気だった。その様子を見た時何か嫌な予感がしたんだが……。

それにオレの身体を頭の天辺から足の先まで何かを確認するようにじっくり見ていたな。

つまりコイツは脅して伝えさせた話を聞いてオレに喧嘩を売ってきたんだろう。まったく……、何忘れているんだよ、オレの莫迦野

郎が！　いや、オレは野郎じゃないけどさ……とか言ってる場合じゃないな！　くそっ、柱危ないな！

「はあ……」

くそ、ダメダメじゃねーか、オレ。
自分の莫迦さ加減に思わず溜息を吐く。

「溜息とは余裕じゃないか」

いいえ、違います。私は自分の愚かさに落胆しているだけです。
なんて言う訳にはいかないから誤魔化そう。

「いやなに、ちょっとした事に気づいて、そのことに対して笑いを通り越してつい溜息がな……。ああ、安心しろ。やっとやる気に火が点いたところだ」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべて挑発する。それを見て、アイツは愉しそうに口角を上げた。
さて、挑発したはいいものの、どうしたものか……。柱は奴の能力では無い気がするから攻め辛い。

「まあ、やるしかないんだけどな」

能力が判っていないからと言って攻めなければ勝てる勝負も勝てなくなるからな。
神様目掛けて真正面から突っ込む。飛んでくる柱は最小限の動きでかわしていく。
それなりに距離が縮まったところで、向こうは勝負に出た。

「ほら、これでどうだい！」

オレの前後左右上下斜め全てに柱を同時に落としてきた。何とかかわしたが、逃げ場を完全に消されたオレへと止めの柱を落としてきやがった。

能力を使えば簡単に、かつ無傷で防ぐことができるが、敢えてこの局面を能力を使わずに乗り切ることを選択した。

……何故この選択をしたのかを後日考えたのはまた別の話だ。

踏ん張る為に妖力の一部を足腰に使い、余った妖力は右の拳に集める。

神力を宿す柱に対して真っ向からぶつかっていく。

「いいいいいいいいいやっ！！」

全身を回転を使って右の拳に力を伝えさせ、出来うる限りに破壊力を上げる。

必要以上に力む事無く、それでいて全力の力で柱を殴る。

「ほぉぉぉぉぉおおおおおう！！」

柱に罅が入っていき、轟音を立てながら崩れていく。

代償としてこっちの拳も無事じゃないけどな。

「はっ！　まだまだいくぜ！」

自慢の柱を砕かれ、呆けている間に間合いを詰める。

一瞬の間に我に返り迎撃の態勢をとる神。流石に喧嘩を売ってくる程には闘い慣れているわけか。

右手の怪我を度外視した乱打で攻めるが、軽いものは防がれ、重いものは往なされる。せめてもの救いは、相手の反撃が少ないとこ

ろか。
　このまま殴り合いが長引けば、拳を痛めているオレが不利になるのは明らかなので、隙をついて間合いを空ける。
　ここまで攻撃を通せないとは思わなかった。

「……お前、何の神だよ？」

　少しばかりの休憩であっても、右手を癒やす時間を稼ぐ為に話し掛ける。

「私は風神。風神の八坂神奈子だ」

　風神？　風神ってことは能力は風を操るのか？　いや、でも神なら嵐とか操れそうだけど……。
　『嵐を操る程度の能力』？　なんか『風を操る程度の能力』より小さく思うのは気のせいか？　嵐は風の種類の一つ、みたいな感じがするんだよ。
　ん……？　嵐？　嵐と言えば暴風雨。八坂は風神で、強い力を持っている。つまり、風ではなく、風雨を操るのか？　それとも天候をも意のままに操ることができるのか？　もし天候を操れるならこれ程の強さを持っていても可笑しくない。寧ろ相応しい気がする。だがもし操れたとしても、戦闘に活かす為には相手に依存するという不安定さがある。しかもオレの能力は天候に大きく左右されない何でも燃やせる炎だし。……手段が無いから柱を落としてきていたのか？　いや、それは無いな。さっきの至近距離での殴り合いでオレが優勢だったにも関わらず八坂に決定打を与えられなかったわけだし、近接格闘の技術は十二分にあるってことだ。八坂が虚を付かれずに間合いを詰めて殴り合えば、オレと互角かそれ以上の実力があるってことだ。
　時間稼ぎをする為に情報を聞き出した訳だが、結局分かったのは

未だに能力は判らないってことと八坂の方が上ってことかよ。
……あまり関係無いが、勝手にとはいえ相手は名乗ったんだ。こちらも名乗るのが礼儀だな。

「オレは火産霊「知っているさ」……ん？」

知っていても名乗りを邪魔するのはどうかと思うんだが……。というか知っているなら最初から名前で確認しやがれ。

「私は神の名を騙る妖怪風情を懲らしめに来たんだからな」

懲らしめるんじゃなく、不意を衝いて問答無用で殺しに掛かれば良かったんじゃないか？　なにより「闘ってくれないか？」って聞かなくて良いだろ。
まあ、オレはそんなことより神の名云々が気になるんだが。

「何の事を言っているんだ？　オレの名前は火産霊沙羅で、火産霊沙羅とはオレがオレである証の名前だ。例え同じ名の神が居たとしてもオレはその神を知らないし、その神の名に験を担いで名付けた訳じゃない。よって騙ったつもりは一切無い」

謂れの無い文句を言われる筋合は無いんだが……。
拳を作ったり掌を広げたりして具合を確かめる。よし、右手はもう大丈夫だな。仕切り直しだ。神の名については八坂を倒して問えばいい。

「ほら、いくぞ八坂神奈子！」

自然と心が躍り、口角が上がる。八坂を倒す事以外は頭に無い。これ程まで楽しい事は初めてだ。

さあ、第二幕の始まりだ。頼むから早々に壊れないでくれよ？

第7話：対風神（後書き）

戦闘シーンは続きません。文才があれば第2幕どころか決着まで書いたんですが……。後、今回の話は諏訪大戦前あたりのつもりですが、次回の始まりの時点で時代がかなり進むと思います。

神の名云々についてですが、『火産霊』はカグツチの別名です。

第８話：料理って素晴らしいよね（前書き）

うー……調子が悪い。もともと文才が無いのに調子が悪くてさらに酷いことになってる。２ヶ月以上の時間掛かった上に、展開が無理矢理とか、こんなんじゃあダメだろ……。ｏｒｚ

ただ、この程度のことで「スランプだ。だから書けない」なんて言い訳をするつもりはないし、自分はスランプだ、なんて全く思っていないけどね。単純に力不足なだけですよ。

第8話：料理って素晴らしいよね

最近は相手が弱過ぎてつまらないな。……まあ、あの風神に負けてから毎日鍛えてるオレが言うのはアレだけどな。

あー、思い出しただけでも腹が立つ。乾を創造する程度の能力って何だよ。それを聞いただけでどんな能力か判る訳無いだろうが。

くそ、次会ったらあの顔ぶっ飛ばしてやる。洩矢の王国を下した？　それがどうした。オレが八坂（アイツ）を殴り飛ばす事に変更はねーよ。

「あー、もー！」

負けた時のことを思い出し、向ける相手の居ない怒りを拳に籠めて地面に叩きつける。

多少地形が変化したが気にしない。だってそれ以上に気にしないといけないことができたから。

「……はあ」

またかよ……。本当に物好きな奴だな。

最近誰かに見られている。しかも、物陰からではなく、別の空間から見られている。何故気付いたか？　それは勿論勘だ。

さて、何時も通りに追い払うか。視線を感じる場所に炎を出す。相手からはいきなり目の前が燃えだした様に見える筈だ。

「最近よく思うけど、鍛練は重要だな」

宙で燃え続ける炎を見て実感する。妖力は生きていれば勝手に増えていくけど、それ以外は鍛練しないと伸びないからな。

身体は勿論のこと、戦闘での立ち回りや能力の使い方についても

しっかりと鍛練している。その結果、昔は相手を直接燃やすことしかできなかったけど、今では特定の場所の空気だけを燃やすこともできるようになった。
これにより、相手の目眩ましや罠などにも能力を使え、戦略の幅が広がった。
後、妖力を用いれば空を飛べる事に最近気付いた。更に手や足の先から炎を噴射させることで加速も可能ときたもんだ。

「今のオレならもう少しマシに八坂と闘えるな」

まだ勝てはしないだろうけどな。悔しいが、それほどまでの実力差がある。
まあ、今は八坂の事はおいといて。

「さて、さっさと逃げますか……」

眼眩ましにも限界があるし、早いうちにここから離れないとな。
さて、これからどうするかな？
噂では、都には『かぐや姫』なる大層美しい女性が居るようだけど、見に行くのも一興か？
……いや、都には陰陽師が沢山いるし、オレは特に見たいとは思わない。そこまで興味を持っている訳ではないのに命を危険に晒すのは冒険しすぎだろう。高い危険を潜る割には見返りが安過ぎる。
確かに、陰陽師なんてすぐに燃やして殺せるが、それはそれで駄目だ。陰陽師を殺すのは数人程度なら問題は無いだろうが、数十人ともなると妖怪を退治する人間が少なくなり、結果妖怪の数が多くなりすぎて均衡を失って、人も妖怪も共倒れになってしまう。
別に人間と妖怪が滅びることに関心は無いし、滅びる程度だったのなら滅びてしまえ、がオレの考えだから人間と妖怪がどうなって

もいいと思っている。なんせ自分が一番大事だからな。
人間自体がどうなろうと知ったことではないが、人間の作る飯はそれなりには美味いので、それが食えなくなるのは嫌だな。
という訳でかぐや姫を見に行かない。……今まで通り気の向くままにぶらついていくか。
厄介な事には首は突っ込まない方がいい。突っ込むのならあらゆるものを自力でねじ伏せる程度には力が必要だろう。力が無いのに手を出すのは死に繋がるからな。
オレにはまだそこまでの力は無い。そう易々と死ぬ事は無いが、それでもまだまだ足りない。せめて八坂と互角くらいの力がつくまでは厄介事に首を突っ込まないし、馬鹿もしない。
というわけで、都の代わりに何処へ行こうかな？
鬼が居ると噂の大江山にでも行くか？
……他にいい案は思いつかないし、顔見知り程度でもいいから鬼と知り合うのは悪くは無いか？　危険だけど行くべきだな。最悪逃げれば良い訳だ。能力を使えば相手の妨害をしつつ逃げることも可能だし、大丈夫だろう。ただ会いに行くだけだ。厄介事にはならないだろう。
よし、そうと決まれば早速準備だな。鬼は酒が好きだと聞くし、土産として持って行かないとな。となると……遠方に行くか。大江山から遠く離れた地で造られた酒なら多分鬼達には珍しいだろう。
今後の方針も決まったし夜闇も深くなってきたことだし、さっさと準備を終わらせて寝るとするか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1143s/

東方蜥蜴噺

2011年10月5日02時53分発行